

ちやう じゃ ぐう い
長者 窮子



ある^{くに}国にお金持ちの父^{ちち}と息子^{むすこ}が
いました。息子^{むすこ}は小さい^{ちい}時に^{とき}家を^{いえ}
飛^とび出^でし。大人^{おとな}になり、今^{いま}では
働^{はたら}く所^{ところ}も食^たべる物^{もの}も
ありません。





おあこ おお いえ まえ
息子は大きな家の前にたどり着きました。
しかし、そのいえが ちち いえ
父の家だとは知りませんでした。

^{ちち おや} 父親は ^{ひとめ} 一目で ^わ 我が子だと ^ニ 分かりました。が！

^{むすこ} 息子は ^{ちち} 父のあまりに ^{リッパ} 立派な ^{すがた} 姿におびえ、

^{ちち} 父だと ^{きづ} は気づき
ませんでした。

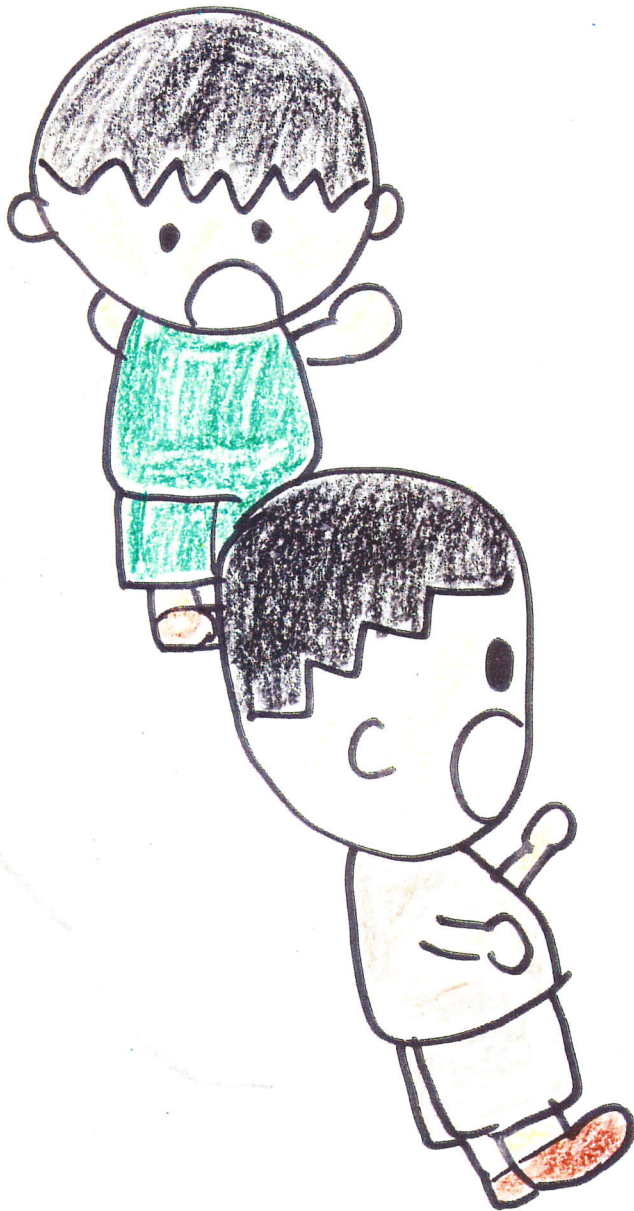




息子は怖がって逃げようと
しました。父は家来に。
「あの男に近づきお前のお手伝
いをさせなさい。」
と言いました。

^け ^{らい} 家来は ^{おとこ} 男に ^{ちか} 近づき、

「たくさんの ^{かね} お金^{しごと} がもらえるいい仕事^{しごと} があるよ！ ^{ぼく} 僕たちと ^{いっしょ} 一緒に ^{はたら} 働か^{はたら} ないか？」
と ^{さそ} 誘^{さそ} いました。

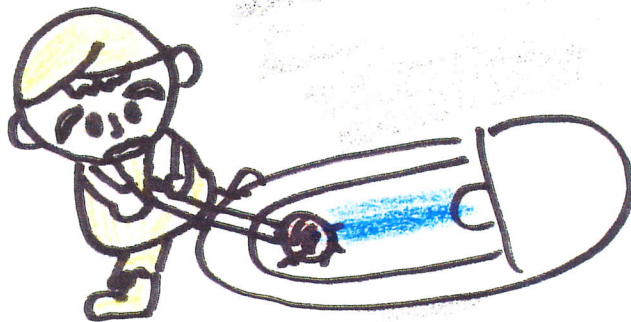


おとし きょう た もの かね
男は 今日 食べる物もないし、お金も
もらえるならと、嫌々でした。が仕事
を始めて。はい



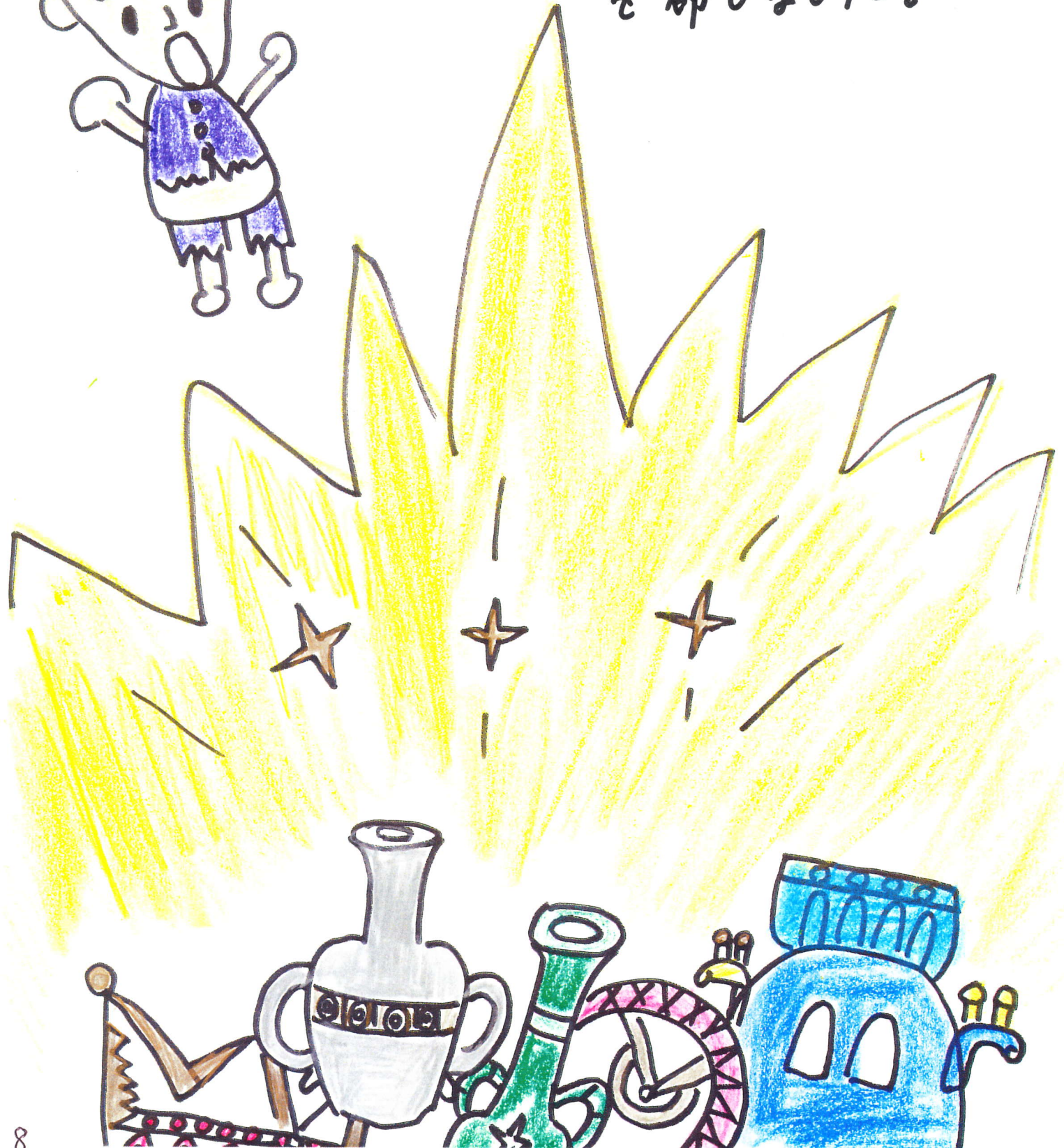
ちち^{ちち}は、^{じぶん}自分も^{きた}汚^{ふく}ない^き服^{かい}に着替^{おとこ}え、男と
いっしょ^{いっしょ}に^{みんな}皆の^{いや}嫌^{そうじ}がる^よ掃除^{はな}をし、良^よき^{はな}話し
あいて^{あいて}相手^{あいて}になりました。

^{なが}長い^{ねんげつ}年月^{すに}が^{おとこ}経^{はじ}ち、男^いは^い始^いめ^いは^い嫌^いが^いっ
て^{しごと}いた^{しごと}仕事^{じぶん}も、自^{おの}分^{おの}から^{すす}進^{すす}んで^{すす}する^{すす}えう^{すす}に
か^か変^かわ^かって^かい^かきました。



おとこ み
そんな男を見て、

ちち たからもの つ
父は宝物の詰まった
くら まも たいせつ しごと
蔵を守る大切な仕事
を命じました。

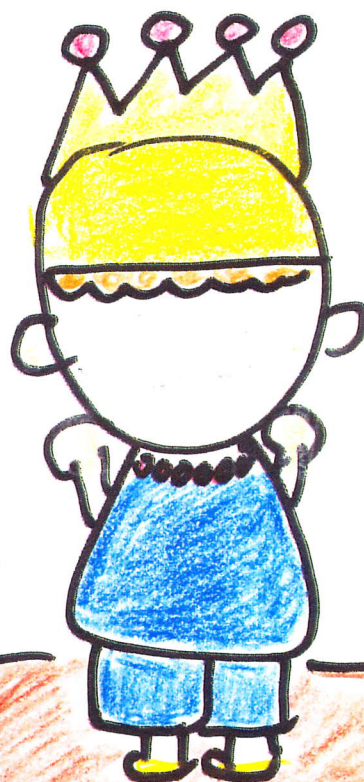




ちち 父は ちち
 みんな 皆を みんな
 あつ 集めて、その男が 自分の
 おとこ
 いぶん
 ほんとう 本当の 息子であることを話し
 むすこ
 はな
 すべ 全ての 宝物を 息子に 譲ることを
 たからもの むすこ ゆず
 伝えました。



息子はこれを聞いて
とても驚きましたが、長い
間見守ってくれた父に
べから感謝し、宝物を
守ることを誓いました。



〇〇 あとがき 〇〇

この絵本は「三車火宅」に続く法華七喻の第二話で、「長者窮子」というお話です。

このお話は、お釈迦様が直接語られたものではなく、四人の声聞が小さな悟りに満足していた自分達を仏様が方便を用いて大乗の教えまで導いて下さった慈悲心にふれ、喜びを表わしたお話です。

この絵本の中に出てくる父は仏様、息子は私達衆生を表わしています。

仏様に背を向けて生きようとしても、人は本性に従い、最後には仏様の元へ近づいていきます。しかし私達は仏様の教えが深遠なのでその境地に入れる訳がないと卑屈になってしまいます。

それに対し、仏様は声聞と縁覚の境地を示す事によって、自分自身の佛性に目覚めさせようします。仏様は最初に心の迷いを取り除く事を教え、徐々に段階を経て導き、仏様と私達は一体である事を明らかにします。

自分は至らないものだ」という考えを捨てて、自分も仏の子であるという真実に目覚め、自己の本質の尊厳さを発見してほしいという教えのお話です。

私達は 仏様に生かされています。

仏様のお導きで修行する事に依り、自分はいの
子であるという事を 知った時、誰もが幸せになる事
が出来るのです。

この絵本を 一人でも多くの方に読んで頂き、法華經
の素晴らしさを感じて欲しいと思います。

長者窮子

H 22. 10. 10

作成： 宝雲山 龍正寺 宝龍会

